夜話

芸術・歴史・紀行

真一郎

読売選書 33

著者紹介　**（なかむら・しんいちろう）**1918年（大正7）静岡県生まれ。1941年（昭和16）東大仏文科卒。小説に「死の影の下に」「回転木馬」「恋路」「感情旅行」「自鳴鐘」など，評論に「芥川龍之介の世界」「頼山陽とその時代」「この百年の小説」など著書多数。

読売選書 33　　定価一、二〇〇円

暗泉夜話（あんせんやわ）
——芸術・歴史・紀行

昭和五十年二月十五日　第一刷

著　者　中村真一郎
編集人　松田延夫
発行人　二宮信親
発行所　読売新聞社
東京都千代田区大手町一～七～一　〒100
大阪市北区野崎町七七　〒530
北九州市小倉北区明和町一～一一　〒802

印刷所　株式会社三陽社
製本所　大口製本印刷株式会社

© SHINICHIRŌ NAKAMURA, 1975
1395-301330—8715

暗泉夜話　目次

見ゆるもの、見えざるもの　7
『源氏物語』の三つの問題　9
一、世界文学のなかの『源氏物語』　9
二、『源氏物語』と小説　20
三、『源氏物語』の人物たち　31
建築をめぐって　――丹下健三氏に――　43
一、出会い　43
二、伝統　50
三、芸術(一)　57
四、芸術(二)　64
五、労働と愛　72
六、眠りと死　78
七、空　85

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八、神の宮居　92
九、未来への幻想　99
ヴェルメール　105
モンドリアンと抽象画　119
歴史における人間像　139
聖徳太子　141
菅原道真　152
西行、俊成、定家　――歌作精進の三名筆　172
徳川家斉　193
内なるものへの旅　209
駿遠歴史散歩　211

洛西・水尾　――千年の孤独な山村　225
梅崎・椎名文学紀行　238
坊の津＝桜島幻想　238
故郷であって故郷でなく　249
フランスの精神風土　261
あとがき　277

装丁　栃折久美子

暗泉夜話

見ゆるもの、見えざるもの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

『源氏物語』の三つの問題

一、世界文学のなかの『源氏物語』

世界文学のなかで『源氏物語』はどのような位置を占めるか。――

戦後二十年、敗戦直後は世界の何等国などと、日本人自身も自信を喪失していた我が国が、政治経済の面で極めて危険なヒズミを残しながらとはいえ、とにかく世界の数少ない文明国にまで、国力を回復するという、奇蹟的な躍進を実現しつつあるのは事実である。

そうなると、国民自身も自信を回復して来たのは当然で、物質的繁栄だけでなく、日本の文化そのものの価値も、世界的基準で考えたくなって来ている。

そういう時、我が文学の代表的古典が、世界のなかで、特に先進西欧諸国のなかで、どのように受け入れられているのか、という問題にも、興味を持つ人が少なくないだろうと思う。

しかし、絵画や音楽とは異って、文学は特に言葉の芸術であり、日本語は西欧語と極めて異った構造を持っており、しかも西欧諸国における日本語の普及率は、目下のところ実に低い。

その上、文化、文学というものはひとつの国民生活の伝統のなかの産物であって、その成立には一国民の生活の様々な複雑な要素（たとえば伝説、民俗、習慣、社会情勢など）が関与しているから、全く文化圏を異にする人々には、理解困難な部分が多いのではないかという議論がある。

日本人には西洋の文学は、本当には判らないのだ。西洋人には日本の文学は、やはり解りにくいのだ。——そうした感想を口にする人々も少なくない。

しかし世界の趨勢は、否応なく相互理解の方向へ進みつつあるし、過去の文化遺産といえども、ひとつの文明の中心において生産されたものは、かなりの程度に普遍的な理解を可能にするものである。（ひとつの文明は、その盛時においては、諸民族を統一してひとつの世界を形成していたのだから。）

そうして、実際に、たとえば中国の李白の詩も、インドのカーリ・ダーサの芝居『シャクンタラ』も、ペルシャのオマール・カイヤムの抒情詩『ルバイヤット』も、アラビアのイブン・アル・ラシッドの『千夜一夜物語』も、今日では西欧で、ギリシャやローマの古典と同じように、エキゾチックな異国の文学というより、ひとつの「世界文学」という圏のなかの、代表的作品として受け入れられているのである。

ということは、たとえば『ルバイヤット』は、イギリスの後期ロマン派の詩人たちに同時代の新しい美学的傾向を持つものとして歓迎され、『千夜一夜物語』は構成の上でプルーストに徹底的な影響を与えた。つまり西欧文学の流れのなかへ導入されたということである。——それはたとえば江戸後期の浮世絵がフランス印象派を生むのに役立った事情に似ている。

同様にして、『源氏物語』は二十世紀前半のイギリスのブルームスベリー文学グループのなかで翻訳され、そのグループの作品のひとつとして、新しい文学運動の進展のなかで役割を果した。やがて紫式部の影響を受けた作家が登場するかも知れない。

つまり『源氏物語』には、世界文学のなかで二つの位置があるわけである。

第一は、その作品の生れた時の、本来の位置である。

——この方の位置について、大きな誤解が我が国にあるので、それをまず訂正しなければならない。

これは国文学の専門家によって時々、説かれることだが、『源氏物語』は「世界最古の文学」だという珍説である。

イギリスにも、フランスにも、ドイツにも、十一世紀の初頭には、これほどの文学が生れていない、というわけである。

英仏独に関する限りそうである。しかし、「世界文学」はこの三つの近代国家の独占物ではない。中世の後半にようやく国家として成立してきたこの三国に、国家成立以前にその国の文学がなかったのは論理的に自明の理である。

国文学者がそういう珍説を吐くのは、多分、大学で国文学を勉強していた青年時代に、英仏独の外国文学科に、絶えず圧力を感じていた、その非衛生な精神状態の残存なのである。コンプレックスの裏返しなのである。

しかし、落ちついて考えてみれば、たとえば『源氏物語』の十世紀も以前に、お隣りの中国や、またギリシャ・ローマ世界は、近代の文学に優に匹敵する厖大な「文学」を生んでいたのである。そんなことは特別に研究してみないでも、中学生でも知っている事実である。

また、この「世界最古の文学」という表現のなかには、文学を小説の同意語として用いるという、二十世紀日本の読書界の習慣も反映しているのかも知れない。つまり「世界最古の小説」というつもりなのかも知れない。

なるほど、ギリシャ人が知らなくて近代人の知っているものは、わずか二つだけある、とフランスのピエール・ルイスという世紀末作家が冗談をいっている。その二つとは「タバコと小説」だというのである。

しかし、この冗談もどうやら時代遅れになった。考古学の発達は、古代世界においても、タバ

コが常用されていた気配を発見しつつあるようだし、ギリシャ人の生んだ「スクリプタ・エロチキ」と呼ばれる一群の小説も、今日、充分に「小説」として読まれるだろう。（たとえば『ダフニスとクロエ』や『黄金の驢馬』――ピエール・ルイスの時代には、自然主義の全盛期で、その小説観からすると、ギリシャ小説は、小説とは見なされがたかったかも知れない。となると、我が『源氏物語』も殆んど同じ理由によって小説失格なのである。）

ローマになれば、もう堂々たる長篇小説『サチリコン』が、ペトロニウスの手によって書かれ、これは充分に近代小説的な見方でも「小説」なのである。（もっとも、この作品は今日、完全には残っていない。）『源氏物語』は『サチリコン』よりも千年後に書かれたので、到底、世界最古を誇るわけにはいかない。

そればかりか、『源氏物語』は恐らくお隣りの中国の唐代の伝奇類の影響で作られたので、ということは中国には既に、小説が存在していたということになる。――その上、平安朝文明というのは、トインビーのいわゆる「半文明」であり、中国文化圏の圧倒的な影響のもとに形成されながら、半ば独立した独自な文明となって行ったので、『源氏物語』にも、その半文明の性格が強く刻印されている。

世界史のうえでは、おそく出発した日本は、先進国の中国やローマがもう中世へ入りかけていた時代に（ダンテが中世文学の代表作『神曲』を書いたのは十三世紀である）、ようやく古代文

明の盛期に達し、そして『源氏物語』のような傑作を生んだのである。

つまり『源氏物語』は「世界最初の文学」ではなく、「古代世界、最後の文学」なのである。

これが、世界文学における、この作品の本来の位置である。

そうした位置は、特に新しい感受性によって捉えられなくても、歴史的に自ら決っている。しかし、第二の位置、今日における位置ということになると、話は変ってくる。

ここでもう一度、外国人に『源氏物語』は、一体、本当に判るのか、という問題が頭を抬げてくる。人情、風俗の異った西欧の人間に、「もののあはれ」が理解できるかという問題である。

しかし、これは一方で、「人情、風俗」は、国によって異るとしても、時代によっても変化するということを見落した議論になる惧れがある。

たとえば、『源氏物語』の生れた時代、あの作品の描き出している時代は、男女関係においても、一夫一婦制ではない。今日の日本や西欧では、夫が別の女性を愛した時、妻は道徳的に正しい怒りを表明することができ、その怒りは社会的に支持される。しかし平安朝においては、その場合、妻が子供を連れて実家へ帰れば（夕霧の家庭におけるように）、その時代の道徳的基準からすれば、妻の方に家庭を破壊したという非難が浴びせられる。つまり妻は、道徳的にも法律的にも、夫に対する既得権は保証されていないのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com